HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小特集　日本の科学技術コミュニケーションのこれから
Citation	科学技術コミュニケーション, 7, 55-55
Issue Date	2010-02
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/42661
Type	bulletin (other)
File Information	JJSC7_006.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

小特集
日本の科学技術コミュニケーションのこれから

北海道大学CoSTEPでは，2010年1月23日と24日の2日間，「日本の科学技術コミュニケーションのこれから」を考える国際シンポジウムを開催した．そこで報告された6編を集めたのが，この小特集である．

シンポジウムの一日目には，「新しいコンテンツの創出」に焦点を合わせた報告や問題提起が行なわれた．石村源生は，「情報があふれる現代社会において，新たに科学技術コンテンツを制作する意味はどこにあるのか？　鍵となるのは，社会や共同体におけるコミュニケーションの布置と動態をつぶさに見据え，適切にコンテンツを位置づけること」だと指摘し，CoSTEPが教育実践を通してこの点をどのように追究してきたかを報告した．Lloydは，ニュージーランドのオタゴ大学を拠点に展開している科学コミュニケーション教育に触れながら，日本の科学コミュニケーションの優れているところ，欠けているところなどについて，国際的な視点から分析した．そして小出五郎は，事業仕分けを例に取り上げつつ，「円滑な科学コミュニケーション活動のためには，送り手にも，受け手にも必要なリテラシーがある．これらの活動を実りある，継続的なものにするため，どのような課題を解決しなくてはならないか」について問題提起した．

二日目には，「対話の場の創造」に焦点を合わせた報告が行なわれた．三上直之は，「対話の場の創造」にむけCoSTEPが実践してきたさまざまな活動（サイエンス・カフェ，コンセンサス会議など）をふりかえりながら，それらが目標をどこまで達成したかなどについて報告した．Wakefordは，NanoJury の実施に関わるなど，科学技術への市民参加に精力的に取り組んできた経験をもとに，科学技術への市民参加に関して，イギリスを中心とする最新動向について報告した．そして小林傳司は，「科学技術への市民の関与」に向け，日本でこれまでに実践されてきたさまざまな活動をふりかえりながら，市民の関与がどこまで実現したのか，どこに課題があるのか，「市民科学」の可能性は，などについて報告した．

このシンポジウムの様子は，インターネットを使って生放送するとともに，一部を除き，以下のURLに録画されてもいる．紙面の都合で収録することができなかった，本シンポジウムでのディスカッションについては，その録画で一端をご覧いただくことができる．

http://www.ustream.tv/user/costep_sympo